

後で判明したことだが、13日は敵がサイパン上陸を執行せんものと、数十隻の軍艦を近接させて猛攻撃を開始していたのであるから、「門司丸」は全く悪い所に引き返して来たことになる。

たちまち敵艦に捕捉されて雨のような砲弾の洗礼を受けた。午前3時30分、船内には身を隠す場所もなくなり、生存者全員が海中に身を投じた。

「門司丸」はその日の午後5時30分頃、満身創傷となり黒煙をあげて海中に没した。

米艦に救助されハワイへ送られた山口さん

「ばたびや丸」で母を失った山口さんは、この時3人の妹と共に「門司丸」に在った。爆発音が断続するうちに、鼻をつく火薬の臭いが流れ込んでくる。船内には避難者の4分の1も残っていなかった。彼女は後部左舷の縄の垂れた避難台に走る。機銃弾がすぐ近くで炸裂する。

恐怖におびえる妹たちを叱りつけ、追い立てしていると、「お嬢ちゃん」と声をかけてくれた人がいる。若い軍属で、彼は3人の妹はあとで連れて行くから、とりあえず一人で海に飛び込みなさい、という。

3人の妹たちは1枚の細長い板きれに坐らされ、どこからか持って来られたゴザをかぶせられる。火の粉や弾の破片をふせいでくれるのだと思った。しかし軍属の心は4人の生命を見殺しにするより、一人の若い命を救おうとしたのである。

泳ぎの出来ない彼女は、投げ込まれた丸太にやっと辿りつき、女学校の同級生がすぐ近くにいるのに気がつき、やがて泳いで来た年上の女の人と3人で、2本の丸太を脇にはさんで漂流する。その3人を救助したのは、アメリカの駆逐艦だった。

死んだつもりで彼等の命令に従って、やがてハワイの収容所で手当を受け、独り生きた淋しさを味わうことになるが、サイパン戦の終結と共に、サイパン島に送還され、オレアイの収容所で多くの学友と再会することになる。

今もサイパンに沈む「睦洋丸」

続々とサイパン島から退避して行く僚船を見ながら、やむなく残留し哀れをとどめたのは東洋汽船の「睦洋丸」(2,276トン)である。

本船は昭和19年4月25日、横浜を出港してサイパン経由5月8日にヤップに到着、復航は同島引揚邦人約60名を乗せて5月20日に内地に向け出帆した。が22日午前8時頃、米潜の攻撃を受け、3発目の魚雷を船尾の舵部に受け推進器を破壊、「天龍丸」に曳航されて25日サイパン島に投錨した。応急修理をなし内地向けの曳航待機中にサイパン戦に巻き込まれる。

以下本船一等機関士による遭難報告書によって、その経過を辿ってみる。

6月11日午前11時30分頃より米軍艦載機群ノサイパン島爆撃開始セラレ当日ハ主トシテ地上攻撃ニ終始セルタメ本船ニ損害ナシ。

翌12日未明ヨリ米機群ノ爆撃再開セラレ本船ニモ数機ノ集中攻撃ヲ受ク。午前7時右舷ニ至近弾ヲ受ケ右舷中央部外板其他破損シ機関室ニ浸水シ始ム、其際上甲板上ニ応戦中ノ数名ハ重軽傷ス。

午前7時半ニ至リ第2弾ハ船橋樓ニ命中シ当時士官食堂ニ於テ負傷者手当中ノ一等航海士谷口久雄以下本船乗組員7名及ビ海軍警戒隊^{文字不明}辺兵曹外2、3名並ニ、アンダーブリッジ予備炭庫付近ニ於テ作業中ノ機関長河田虎雄以下乗組員5名戦死ス(氏名別表の通り)同時ニ船橋樓付近ヨリ発火、火勢ハ猛烈ヲ極メ船長ハ午前8時頃全員退船を命ズ。

船長以下乗組員39名、警戒隊員約10名水中ニ飛込ミ後本船ヨリ落下水船トナリタル救命艇ニ全員収容、正午頃付近ニ在リシ発動機船ニ曳航サレテ陸岸に至リ全員上陸ス。十数名ノ負傷者ハ海軍病院ニ収容、船長以下数名ハ警備隊ニ入隊ヲ申込ミタルモ許サレザルタメ再ビ海軍病院ニ至リ負傷者ノ看護ニ當ル。

当時病院モ危険ナルタメ患者ハ次々

ト病院ノ後ニアル山中ニ移送シ6月15日病院モ焼失シタルタメ舵手渡辺義夫、同佐藤勇、調理手竹森正男ノ3名ハ病院内防空壕ニ残シ他ノ者ハ山中ニ入ル。右病院防空壕ニ収容サレタル3名ハ翌16日直撃弾ノタメ戦死ス。残存ノ者ハ山中ノ病院ノ移動ト共ニ次々ト移動シ此間機関員金井芳一、同平野信夫、同植田基次ハ戦死ス。

7月6日ニ至リ戦況激甚ヲ極メオ互ヒノ連絡モ取レズ病院ハ止ムナキニ至リ此頃ヨリ互ヒニ消息判明セズ。

7月7日及ビ8日残存ノ船長以下二十数名ハ総攻撃ニ参加シ別表生存者ノ外殆ド戦死セルモノノ如シ。

別表生存者5名ハ負傷ノタメ山中ニ於テ行動ノ自由ヲ失ヒ山中洞クツ内各所ニ潜伏シアリタルモ米軍ニ捕ヘラレ病院ニ収容ヲ受ケ治療ノ後回復セルモノナリ。

尚本船ハ全員退船後打続ク米軍ノ猛撃ニヨリ遂ニ沈没セルモノト見エ爾後船影ヲ見ズ。

「睦洋丸」は今もサイパン港区にその残骸を残し、水中展望船の格好の観光ポイントになっている。

「門司丸」同様、機関故障のためサイパン島に引き返し、以後の空襲で沈没したとされる「富国丸」(2,851トン)については詳細は不明である。

6月20日、サイパン沖海戦の補給船として出撃した国洋汽船の「清洋丸」(10,536トン)と、浅野物産の「玄洋丸」(10,018トン)の両船は艦載機の猛攻を受け、いずれも航行不能となり、味方駆逐艦の砲撃処分を受け沈没した。

ロタのテルノン付近で、ダイブ・スポットとなっている「松運丸」も、サイパン戦の初期6月12日にロタ島の近くで空襲を受け船体が破損し、テルノン沖に避泊修理中に、24日攻撃され魚雷2発を受けて沈没した。

グアム島のタロホホ湾で修理中であった「日裕丸」(6,817トン)が、7月13日に同泊地で空爆を受け沈没したのを最後として、この地域に於ける戦没船は、マリアナ地区の戦闘終結と相俟って、ほとんどその数を増やすことはなかった。

ところでした。

沈没地点から木片などが浮き上がってくる中に、水浸しのライフボートを見つけて仲間と乗り込み、水をかき出しほっと一息つきました。そこへ私の長女と同じ5歳くらいの女の子が木片につかまって流されて来ましたので助け上げ、無事だった千トンの戦時標準型の貨物船に乗り移りました。

女の子の名前は胸に付いていた名札で「大木綾子」と分かりました。父親は南洋興発のテナン製糖所に勤務のため残り、母と姉が「白山丸」に乗船していましたが、二人とも死亡したことが後で分かりました。6月8日、私たちは横浜港に上陸、母と姉を失った大木綾子さんは孤児となり、横浜市の孤児院に引き取られました。

私も今年79歳。子供たちも成長し、孫たちにも囲まれ平和な生活を送れるようになった今、折にふれて思い出されるのは、両親を失って孤児院に入れられた大木綾子さんの消息です。最近特に老齢のせい、生前にこの子に一目でも会いたいとの気持ちが募る一方です。

「白山丸」沈没後、救助された貨物船の甲板上、上陸までの数日間、日に何回となく繰り返される対潜警報におびえて私にしがみついていた綾子さん。毎日がおむすび1個、みそ汁1杯、タクアン3切れ、あとはお茶だけの三度の食事で、私の食べる分も分け与え、どうしても助けてやらねばと、わが子同様に生死を共にしたあの子は今、どこでどうしているかとの思いが頭から離れません。

横浜の孤児院に引き取られた綾子さんは、現在生存していれば54歳です。どうか大木綾子さんを探して下さい。

幸い「昭和36年南洋群島引揚者名簿、南洋群島戦没者名簿」に、大木綾子さんの本籍地を発見し、それがきっかけで、現住所を確認することができ、孤児院入りとばかり思っていたのは間違いで、迎えに出ていた叔母さんに引き取られて成人し、福島県白河市立の中学校の先生になり現在に至っていることを知り、涙のご対面というハッピー

エンドを結ぶことが出来た。

この記事を読んだ浅沼幸市氏からも、綾子さんにまつわる次のようなエピソードが寄せられた。

木村さんと大木さんの再会記事、本当にうれしく読ませて頂きました。私も「白山丸」で遭難した一人です。大木さんについて私も多少思い出があります。

引揚証明書を再交付するため大木さんに「お名前は何ていうの」と尋ねると、「あやちゃん」と自分の名前をちゃんを付けて言うので、私は思わず笑いながら「何あやちゃんっていうの」と尋ねると、また「あやちゃん」と答えるのです。その言い方が何とも可愛く元気で、数日前にあんな恐ろしい目に遭ったとは感じられませんでした。この子は何も知らずにいるのかとふびんに思いながら、ふと胸を見ると名札がついていて、やっと名前が分かりました。

防衛部隊輸送船が次々と敵潜の被害に

昭和19年の6月に入ると、これら引揚船の他に、サイパン防衛部隊を輸送中の船団が、次々と敵潜の餌食となって、サイパン戦をはさんで25隻もの沈没船を数えることになる。

中でも第3530船団として南下中だった第43師団(通称・警)第2次輸送部隊の歩兵第118連隊の主力を乗せた「勝川丸」、「高岡丸」、「たまひめ丸」、「はあぶる丸」、「鹿島山丸」は、6月4日から6日にかけて相次いで撃沈され、サイパン防衛に大きな支障をもたらした。

次いで6月11日未明、敵機動部隊接近の報に、急ぎに港船の集団退避が下令され、「ばたびや丸」ほか大小30余の船団がサイパン港を離れた。この中に最後の引揚邦人が乗船した船がいたことが、退避船団の悲劇を大きくした。

山口房枝さん(南洋群島協会)は、この死の航海の体験者である。父の説得によりやく重い腰をあげた身重の母と3人の妹と一緒に、10日に「ばた

びや丸」に乗船すると、すぐに緊急退避の船団にのみ込まれてしまった。

本船は12日の午後3時40分頃、サイパン北西310キロ付近において、2個編隊35機の艦載機の猛攻を受け、5番および6番艙に被雷、浸水により19時30分船尾より沈没したと記録にあるが、便乗者140名中の18名が犠牲になっている。

近くに僚船「門司丸」がいたので、これに救助されたが、単船北上が難しいと判断した「門司丸」の船長が、サイパンに向け反転したのが次の悲劇を招く結果となった。日本郵船の『日本郵船戦時船史』によって、その行動を再現する。

果たせるかな、船団は翌12日午前9時半ごろから猛烈な敵の空襲に遭い、たちまち支離滅裂の状態に陥った。逃げ惑う各船は、「ばたびあ丸」、「天竜川丸」、「竜田川丸」、「国光丸」、「射水丸」、「神島丸」、「浜江丸」など、次々とその好餌となって撃沈された。

「門司丸」も船体に無数の敵弾を受け無線機を破壊されたが、幸いにまだ航行に支障はなかったため、近くで沈没した「ばたびあ丸」の救助に当たり、便乗していた婦女子や乗組員たちを3隻のボートに収容していたが、空襲は止むとも見えないので救助作業を中止し、護衛艦からも離れて現場から一時退避した。

しかし、逃れてみたものの単独の航海が出来るわけでもなく、午後11時半頃、明石船長は再びサイパンに引き返す事を決心した。船首を返してから敵機は去らず、13日には午前、午後の2回にわたる猛攻撃をうけた。だが運よく、沈没する程のこともなくかろうじて続航した。

そして14日頃午前2時ごろ、サイパン島が見える所まで引き返して来たが、同島は、夜目にも明るく艦砲射撃を受けている最中であることが遠望された。といって今更、独航不能の「門司丸」がどこに退避することができよう。無線機は壊れ、操舵も意のごとくならない状態では、危険を承知しながらも、そこに居るより仕方なかった。

爆雷の爆発で内臓をズタズタにされているが、顔は無傷であどけない18、9の少年兵たちが「お母さん、お母さん」と泣き叫んで苦しむさまは見えていられなかった。召集されたばかりで、グアムの現地教育を受けるはずだった少年たちであった。

機関庫員も島の人々とともに動員され臨時の衛生兵となった。

ある若い軍医が、自分の傷ついた腹を見ながら、「サイパンだったら手術できるが、飛行機はないのか」と機関手たちに聞いていたが、どうにもならない。サイパンから練習機の赤トンボが飛んできて落下傘で医薬品を投下したが、とても間にあわぬ負傷者で、ほとんどが海中で爆発した爆雷が原因で手をつけられなかった。

若い軍医は、あとでサイパンに送られたが、やはり駄目だったようだ。ロタ島が最初にみた悲劇だった。

「新夕張丸」サイパン沖に没す

次いで9月には日本郵船の定航船「泰安丸」が、サイパン島を目前にして雷撃された。このことは本誌第61号にホワキン・サブラン氏の体験談として紹介した。サイパン在住の人達は、ここでも戦争の現実を目の辺りにしてヒシヒシと迫りくる危機を感じずにはいられなかった。18年におけるマリアナ海域での戦没船は19隻に達した。

年があけると19年2月末の博丸をはじめ、2月下旬には6隻もの貨物船がテナアンを中心とした海域で沈没した。この集中的な被害は、2月23、24日の両日、マリアナ諸島を攻撃した機動部隊艦載機によるものである。

中でもサイパン西方海域に沈んだ「新夕張丸」の運命は、戦争の苛酷さを如実に物語っている。以下本船の操舵手として新夕張丸に乗船していた、黒川明氏(南洋群島協会員)の体験を追ってみることにする。

本船は昭和18年8月下旬トラック環礁の夏島に入港し、サイパンまで便乗する多数の民間人を乗せて、25日夕刻、2隻の僚船と2隻の護衛艦で船

団を組み、サイパンへ向け出帆した。

しかし、19時頃、突然、大きな衝撃と大音響に夢を破られた黒川氏は、あわてて船橋にかけ上がる。そしてそこから2番船倉の破孔を見る。150人ほどがそこにいたと思われるが、何人の犠牲者が出ているか全くわからない。火災が発生し、消火に当たる人達が死体を乗りこえてホースを引いて行く。

幸いこの時は、2番船倉の船底に直径5、6米の大穴を開けたまま、艙内に漂う死体を見ながら航海を続け、サイパン港に辿りつくことになる。

船底を破られた本船は、そこで修理待ちとなるが、19年の2月22日、突然、敵機動部隊接近の報を受け、在港船が集団で港から避難することとなった。しかし、本船は満足なスピードを出すことができない。漸く20時スタンバイがかかり、港外へ退避する。退避といっても沖へ出るとエンジンを止め、漂流しているといった状態である。

翌23日2時半近く、「魚雷だ!」という声で仮眠を破られ、退避する間もなく爆発音の中から立ち上がり、ポートデッキに出てみるがポートは無く、やがて右に傾いた本船から振り落とされる様に海中の人となる。やがて仲間のポートに拾われて漂流を始める。

水の入ったポートでは全員(33名)が腰かけることが出来ず、半数ずつ交替で海に入り、敵機の機銃を避けたり、本船がトドメの魚雷を受けて沈没する様を目撃し、その後飲まず食わずの漂流を続けることになる。

そして11日目の朝、1隻の潜水艦を発見、恐る恐る近づいてみて友軍とわかり狂喜する。が、全員精力体力使い果し、助けられた全員が声を出して泣き伏してしまつたと述懐している。

悲劇の引揚船

昭和19年3月に入ると悲劇の引揚船「あめりか丸」の記録がある。本船は1日前に出航した「さんとす丸」を追って、3月4日午前7時にサイパン港を出港している。

サイパン、テナアン、ロタからの引揚婦女子497名その他便乗者17名、

警戒隊10名、乗組員118名を乗せ、6日午前5時21分、ウラカス島北方270浬沖合にさしかかった時、左舷中央部と第4番艙に2発の魚雷を受け、あつという間に沈没した。公式な沈没時間は5時24分とされている。

護衛艦の必死の救出作業もむなしく、引揚婦女子の中、救けられたのは

二見知治(13歳) 金造長男

神奈川県足柄下郡羽村前川650

西 淑子(12歳) 賢 二女

大分県大野郡縮方村耐川1517

本坊 進(12歳) 東一 二男

鹿児島県川辺郡加世田町津貫

の3児のみであった。

警戒隊員に4名、船員に84名の戦死者を出した。

この年の5月までに、緊急輸送に従事した20隻の船舶が海没している。6月に入ってサイパン戦が始まる直前に8隻の沈没船を見るが、この中には、「あめりか丸」同様、引揚婦女子をのせた、「千代丸」(4,700トン)、「白山丸」(10,380トン)の悲劇を見ることが出来る。特に「白山丸」には11歳未満の子供が190名乗船していた。

「白山丸」の遭難には後日談がある。『南洋群島協報』198号に、会員の木村忠男氏が、白山丸で遭難した一人の女の子について以下の記事を寄せた。

「白山丸」遭難の あやちゃんのその後

私は南洋庁の技手としてサイパンに勤務していました。内地勤務の辞令を受け、昭和19年5月31日、サイパン出港の(注・最後ではない)引揚船、「白山丸」に乗船しました。私の当時5歳の長女を含む家族は、これ以前に「サントス丸」でサイパンから引き揚げていましたので、私は単身乗船しました。

6月4日午前4時、敵潜水艦の魚雷を船首に受け「白山丸」は沈没、私たちは幸い後部デッキにいたので海に飛び込み、一刻も早く「白山丸」から逃れようと夢中で泳ぎ、百メートルぐらい離れ後ろを振り返ると、ちょうど「白山丸」が船首から逆さまに沈没する

ミクロネシア 内南洋における 戦没商船の記録 〈1〉

—— マリアナ海域 ——

上 澤 祥 昭 (財)南洋群島協会評議員

はじめに

昨年(1993)秋、太平洋学会の中島専務理事から、サイパンで平和回復50周年を記念して、“SAIPAN IN FLAMES”なる本(以下、SIFと略す)が出版され、その本の16ページに、米軍によって撃沈された日本商船の記録があるのだが、その内容が少々不正確であるように思えるので、チェックしてくれないか、という依頼があった。

私はかつて船会社に勤務していたこと、父が昭和19年9月にバシー海峡で海没していることから、戦時中の日本商船の戦没の記録を追っていた。それを知っている中島専務理事からの依頼であった。

なるほど資料をチェックしてみると、SIFでは戦後の昭和20年9月にサイパン近海で沈没しているとされているKofuku Maru(3,209t)は「康福丸」(3,209t)と考えられ、同船は、日本側の資料によると、昭和18年の9月に佐渡付近で衝突により沈没している等の相違点がみつかった。

また、SIFでは、総トン数19トンから1万トン以上の船まで22隻、雑然と記録されているが、徴用機船といわれた小型漁船等の記録は、仲々その実態が把握できないのが現状である。私の調査は総トン数100トン以上の船に限られているので、やはり一定の線をはいて、その代り克明な調査が必要

ではなかろうかと思われる。

そして、このことから太平洋戦争中のミクロネシア海域における戦没商船を、この辺で一つの記録にまとめておく事に気付いて、その作業にとりかかり、まとまったものから逐次本誌に発表しようとするに至った。

ミクロネシア海域を、旧日本の委任統治領より少し広く、即ち赤道より21度までと東経130度より174度の線で区切り、マリアナ海域、パラオ・ヤップ海域、トラック・ポナペ海域・マーシャル海域の4区分とし、夫々の沈船を追跡することとする。

本号で採り上げたマリアナ海域は、北緯11度から21度、東経130度から148度とした。また、「アメリカ丸」、「白山丸」などは、多少この海域をみ出すのであるが、サイパンよりの緊急引揚船として、その悲劇的な末路を考慮して加えてみることにした。

各船の沈没地点は、船舶運営会記録、各船よりの避難報告書、乗船々砲隊の戦闘記録などに拠ったが、それぞれに多少の相違点がある。また、被弾状況によって、雷撃を受けた地点から惰航して別地点において全没したという例も多いので、正確には実際と相違する場合もあるが、一応の目安として公的に使われている位置を記録した。

マリアナ海域の戦没船は 「松安丸」に始まる

マリアナ海域での戦没船は、昭和18年1月14日の「松安丸」に始まる。ミッドウェイ海戦の敗北、ガダルカナルからの撤退によって完全に守勢に立った日本の防衛圏に対し、本格的な連合軍の反撃が始まろうとしている頃である。

2月から4月にかけて、マリアナ諸島付近、サイパン東方海域において、2隻の大型漁船と2隻の中型貨物船が潜水艦による攻撃で沈没している

同年5月から7月にかけては、8,366トンの「畿内丸」をはじめ5隻の貨物船が沈められているが、中でも6月28日ロタ島ハルノム岬の眼前で一瞬のうちに爆沈した「照徳丸」は、それまで戦場を意識しなかった島の人々を、にわかに関心させる出来事だった。沖繩ロタ会編の「創立10周年記念」号には、次のようにその日の目撃談が載せられている。

昭和18年6月28日ひる12時6分、ロタ島北西の水平線上で、グアム島に向う輸送船の「照徳丸」が潜水艦の攻撃で轟沈した現場を、徳森さんたちは目撃した。船がいくぞ、と見ていたら、ぼっと白煙が上がり、あっという間に沈んで姿を消し、同時に爆音が起きた。ほんの一瞬のことだった。

積んでいた爆雷が海中で爆発し被害を大きくした。数百名の「照徳丸」の乗船者のうち、半数以上が海没した。助けられた人たちの叫び声、泣き声、それからのロタは地獄となった。